

試験研究

視覚欠陥者の教育心理学的研究

研究代表者 梅津 八三
(関西大学)

目的: 盲ろう二重障害者の言語行動形成の過程を通して、すでにある程度明らかにされた学習理論を背景に、他の盲ろう二重障害者、全盲者、弱視者、開眼受術者、および盲を伴う重複障害者に対して、それぞれに適した、学習法を工夫し開発する。これによって、視覚障害者一般の学習法の体系化を計り、さらに、教育一般にも適応しうる、教育の原理と方法を明らかにしていくことを目的とする。

方法: 上にのべた障害者について、障害の種類、程度、観察される行動のレベルのちがいに応じて ① 概念行動の基礎になるための身体的運動、とくに独立歩行と、活発な触運動を起すための指の分化、手首の回転、腕の屈伸などの学習。② 身ぶりサインの導入により日常生活の基本的習慣をつけ、これらによって概念行動の道を開く。③ 触運動によって空間の位置、方向、順序づけを行う触運動の統制学習を進めながら、形の弁別学習を導入する。④ さらに、形の分解・組立て学習を試みることににより操作的行動を引きおこす。⑤ これら概念行動と操作的行動を土台として記号操作を可能にし、さらに、自由な記号操作によって、生活空間の整理・拡大をおこなう。

結果: すでに、かなりの程度記号操作ができあがっている1人の盲ろう者には、生活空間を拡大し、豊かな日常体験を増すために、普通文字を相手の手のひらに書いて交信することの学習に成功した。また、5才で完全盲ろうとなり20才の今日まで系統的な教育がなされず、日常生活の自立と、かなり統制された触運動は可能であるが、いまだ、記号操作の行動が起っていない1人については、形の弁別構成、分解学習から導入して、現在点字法による記号操作の学習が進行中である。同じく、教育がはじめられたばかりの6才の盲ろう児には、身ぶりサインによる日常生活の習慣づけとともに、触運動の統制学習を通して、形の弁別学習を行っている。

数人の年少の盲ろう者、および盲を伴い障害の重度な者については、身体的運動、触運動による活発な行動の自発が著しく乏しいばあいが多い。これらの子どもに対しては、独立歩行、自由な手の運動、よく分化し統制さ

れた触運動を開発する学習法を工夫することが当面の課題である。このことにより、これら障害の重度である者も、概念行動の芽ばえがみられ、学習もかなり進むことが分ってきた。

開眼受術者弱視者については、触覚的なかたちの弁別を強化して、触運動の自己統制による形の構成学習を進めることによって視覚向上訓練の新しい方法を試験中である。

発達障害における停滞と促進に関する研究

研究代表者 園原 太郎
(京都大学)

研究目的: 本研究は、昨年に引き続き、発達における基幹的停滞機能を解明し、この停滞機能の促進に働く経験の機制が機能の流暢化と水準の高次化にあると想定し、発達のクリティカル期におけるこの両機制を実験的に解明し、適切な治療・教育の方法に基礎を与えんとするものである。

研究方法: 上述の目的達成のため、1) 初期学習実験部会; 京都大学文学部教授 園原太郎, 京都大学文学部助教授 本吉良治, 京都大学教養部教授 中島誠, 岡山大学法文学部助教授 三谷恵一, 2) 知能障害研究部会; 大阪市立大学文学部教授 大西憲明, 大阪市立大学文学部教授 大野晋一, 大阪市立大学文学部助教授 生沢雅夫, 京都教育大学教授 住田勝美, 京都教育大学助教授 岡本夏木, 滋賀県立近江学園指導係長 田中昌人, 3) 言語障害研究部会; 奈良女子大学文学部教授 村田孝次, 奈良女子大学文学部講師 安藤照子, 大阪教育大学助教授 村井潤一, 大阪教育大学助教授 田中敏隆, 4) 情緒障害研究部会; 京都大学医学部教授 村上仁, 京都大学医学部講師 高木隆郎, の4部会を組織し、それぞれに適した被験個体, 実験・調査方法を用いた。

研究成果: 主なものを以下に述べる。

1) 生後42日~406日の被験者999人の発達検査に基づいて行なわれた潜在クラス分析の結果は、これまで正常ならびに障害乳幼児の発達診断と障害児の指導とに基づいて指摘してきたいくつかのクリティカル期を支持した。2) 従来教育の対象外と考えられ、また、一般的発達尺度の適用外におかれていた重症障害児に対して、適切な反応喚起の働きかけを伴う相互対応的な臨床的方法を用いることにより、その発達を保障することが確かめられ、発達に対する経験効果の基礎についての理論構成